

## 大原生涯学習センター i - y o u t h における L F A との連携事業の活動報告について

令和3年10月より大原生涯学習センター i - y o u t h で実施している、N P O 法人（L F A）との連携事業について、令和3年度の実施結果を報告する。

## 1 事業概要

N P O 法人のノウハウを活用し、i - y o u t h の「居場所」機能に、キャリア教育や社会的自立に必要な学びの機会を拡充する。その過程で、支援が必要な子ども（大変な困難を抱えている）を発見した際は、必要に応じて関係機関と連携できる体制を構築する。

活動内容	実施日時	対象	定員	スタッフ（L F A）
①居場所の提供（リビング） ②学びの機会の提供（ラボ） ③個別相談	水：15～19時 金：16～19時	13～18歳の子ども	15～20名/日	・責任者1名 ・インターン1名 ・ボランティア3名

## 【事業を通じて L F A が子ども達に提供している価値】

- ・ 1. 安全安心の獲得 2. 受援力の向上 3. 自己実現の機会の獲得  
4. 最低限の社会的自立の力 5. 自己防衛力の獲得
- ・ すべての子どもに上記1～3と、特に困難を抱える子どもへは、4・5を追加して提供。

## 2 実施状況

## （1）リビング（居場所の提供）

月	実施日数	参加者数	スタッフ数	虐待通告実績
10月	8日	184名	職員1～3名、学生ボランティア1～4名	3回
11月	7日	211名	職員1～3名、学生ボランティア1～4名	1回
12月	7日	461名	職員1～3名、学生ボランティア1～4名	2回
1月	8日	209名	職員1～3名、学生ボランティア1～4名	0回
2月	6日	163名	職員1～3名、学生ボランティア1～4名	0回
3月	9日	776名	職員1～3名、学生ボランティア1～5名	2回

※参加者数は延べ数

## 【具体的な活動】

- ・ L F A のスタッフは、子ども達が来ている目的に合わせて、おしゃべりの相手、卓球やカ

ードゲーム等の遊び相手、勉強の相談相手となった。

- ・1人で来ている子がいた場合、子どもの様子を見ながら、他の子どもと関係性が気付けるよう場を整えた。
- ・3月には、子ども達との新たな関係づくりのため、LFAスタッフが得意なことを活かした企画を実施した。
- ・関係性ができてくる中で、子ども達からの相談も増え、虐待が疑われる場合は、子ども家庭支援センターへの通告を行った。

## （２）ラボ（社会的な自立を目的とした学習活動）

月	実施回数	内容	参加者数
10月	2回	「i-youthをもっと面白がろう！」 ・やりたいことを付箋に書き、ホワイトボードに貼っていく	約30名
11月	2回	「みんなでアートをつくろう！」 ・大きなキャンバスに子どもたちが描きたいものを描く	約30名
12月	1回	「染め物ワークショップ」 ・Tシャツやハンカチに藍染めをする	約20名
1月	3回	「動画撮影をしてみよう」 ・i-youthのPR動画を作成するための打合せを実施	約15名
2月	2回	「動画撮影をしてみよう」 ・i-youthのPR動画の打合せと、お試し動画の撮影	約10名
3月	3回	「動画撮影をしてみよう」 ・i-youthのPR動画、卒業する学生へのメッセージ動画の撮影	約15名

### 【具体的な活動】

- ・10月に子どもから、i-youthで実施したい内容のアイデア出しを行い、11月のイベントには、アイデアを出した子どもが、大学生スタッフと一緒に企画側にまわった。
- ・12月のイベントでは、まなぼーと大原の利用団体である「藍染同好会」に協力を依頼し、体験事業を実施した。
- ・1月から3月は連続性のあるイベントとして、i-youthのPR動画作成を目標にした、事前打ち合わせ、試し動画、本動画の撮影、編集等を行った。

## （３）いたばし弁強会（子ども食堂）

LFAの独自事業として、学習支援と食品配布を中心とした事業を展開した。

- ・10月から12月に計7回実施（延べ49名参加）

## （４）フードパントリー（1月～3月）

いたばし勉強会や「リビング」等で経済的な困窮度が高い子ども達の食事ニーズがあることから食材配布を行った。当該事業は、子ども達とコミュニケーションを取りながら家庭での困り具合を聞き出す役割も担っている。実施した結果、経済的に困窮している世帯や、ヤングケアラーの可能性のある子ども達を発見することができた。

- ・毎月60食の配布（レトルト食品や缶詰など）

### （５）周知活動

- ・周辺の中学校や高等学校、区内で活動しているNPO法人、板橋区SSW等にチラシの配布を依頼した。
- ・LINE 公式アカウントを活用し、登録した子どもにイベント実施の告知を行った。

## ３ 主な成果

### （１）LFAと子ども達との関係性構築

関係性が構築されたことで、LFAが活動する日にi - y o u t hに訪れる子どもが現れはじめた。子ども達とのコミュニケーションが深まる中で、学校や家庭などの悩みを相談するようになり、虐待、希死念慮など、大きな課題を抱えている子どもを早期に発見することができた。

### （２）子どもの自己実現と地域の大人との交流機会づくり

ラボ事業を通じて、子ども達が「自分のやりたいと思ったことが実現できる」という経験を積むことができた。また、普段は関わりのない子ども同士が一緒に企画に取り組むことで、新たな人間関係が生まれた。更に、大原生涯学習センターのサークル団体を巻き込んで事業を行い、大人との接点を持つ機会を作ることができた。

### （３）具体的に困難を抱えている子どもの把握

活動を通じて、発達障害により場の空気や相手の気持ちの理解が苦手な子ども、希死念慮を持つ子ども、家庭の事情により小学校に一度も通ったことの無い子ども、ネットを通じて成人と交際する子ども、ヤングケアラーの疑いがある子どもなど、困難度の高い子どもを把握することができた。

### （４）大原生涯学習センターとの連携

活動日に行う大原生涯学習センターとの定例ミーティングにより、課題の共有や見守りのための情報連携、虐待通告の段取りなど、活動をスムーズに行う仕組みが整えられた。

## ４ 今後の課題

### （１）困難度が特に高い子どもへの対応

困難度が高い子どもを把握することができたが、抱えている困難が、LFAスタッフで対応できる範疇を超えるケースがあった。LFAのスタッフは研修により一定の知識を取得しているが、カウンセラーではないため、希死念慮や自傷行為など、利用者の生命に高い危険性がある事象が発生した際の対応方法を検討していく必要がある(i - y o u t hで可能なのは社会教育としての支援)。

### （２）外部機関との連携

i - y o u t hでは、利用者に気になる子どもがいても、本人からしか情報が得られないことや、本人が来訪しないと関わることができないため、見守り続けることができない。そのため、近隣の学校や、児童相談所、フレンドセンター、スクールソーシャルワーカーなど、関係機関と情報を共有し連携した見守り体制を検討していく必要がある。

## 5 総括評価

当該事業を総括した評価としては、第一に支援が必要な子どもを積極的に見付けていくことができた点が大きいと考えている。一般的に行政が行う支援は求める側から声をあげる必要があるが、困難を抱えている若者は、行政に支援を求めることが難しい（やり方が分からない）ことや、自分に支援が必要なことを自覚していない場合もある。そのため、深刻な状況になる前に社会的な自立に向けてサポートできることは、行政にとって非常に意義のある活動だと評価できる。

第二には行政とNPOの役割分担がある。当該事業の効果は、NPOという単一団体が、子ども達に、複数の行政分野にまたがる支援（教育分野と福祉分野）を一体的かつ、タイムリーに展開できる点にあり、それを支えるため、利用者と近い年齢のスタッフが、子ども達との心理的な距離を縮めている。一方で、行政は活動拠点の確保や、関連団体への顔つなぎを行うことで、NPOの効果的な活動を支えることができた。